

公任の『和漢朗詠集』の編纂方法私見

田中幹子

はじめに

- 一 「春興」と「秋興」の紅と碧（緑）、「夏夜」と「秋夜」の短夜と長夜
- 二 春から夏へ「更衣」、夏から秋へ「扇」、秋から冬へ「擣衣」
- 三 「霞」の「かすみ」と「霞^か」
- 四 「花橋」の実と花
- 五 文学史的展開「閏三月」
- 六 再発見の紅「躑躅^{つづじ}」

要旨

藤原公任撰『和漢朗詠集』については、従来から軍記、説話の文飾の典拠や『堀河院百首』以降の和歌の本説、本歌の典拠として、主に資料的価値から論じられてきた。本稿では、編集者公任に注目し、『和漢朗詠集』の上巻の構成、及び、項目内での詩歌配列に編集の工夫を見たい。『和漢朗詠集』の構成は『古今集』を範に、春秋対称に項目が立てられていることが指摘されている。しかし対称性は項目名だけでなく、例えば「春興」「秋興」の色の対（ついで）など、採録されている詩歌の表現にも見られた。又、対称性は春秋に限らず例えば「夏夜」「秋夜」の和歌にも見られた。編集の工夫は、別々の典拠の和歌を対話しているかのような配列にも見られる。さらに、和漢に通じる公任らしく和漢で異なる素材や詠み方の違う素材「霞」「花橋」の詩歌を一つの項目にまとめ上げている。さらに『和漢朗詠集』編集の大きな特徴は、「閏三月」等のように、日本漢詩句や和歌の発想の基となった中国漢詩句を項目冒頭に掲げ、文学史的展開を項目内の配列によって示す点である。

はじめに

一条朝を代表する文化人である藤原公任は、四季を中心に「立春」「驚」等系列項目や季の素材一二五項目を立て、ふさわしい漢詩句と歌を選び、『和漢朗詠集』を編纂した。『和漢朗詠集』は、平安王朝の美意識が反映されたものであり、後世、説話の文飾や『堀河院百首』、『後拾遺集』等の設題や表現に大きな影響を与えたことは、従来から指摘されてきた。しかし、これらは主に、『和漢朗詠集』を斬新な主題、或いは重要な和歌の典拠資料としてそれぞれ個別に注目したにすぎない。

稿者は、『和漢朗詠集』をひとつの美意識の世界と捉え、項目の選び方及び配列について考察して来た。本稿では、今までの拙稿を踏まえながら、項目内の詩歌の配列等にも注目し、『和漢朗詠集』をより全体的な視野で眺め、編集者としての公任の意図を考察したい。

一 「春興」と「秋興」の紅と碧（緑）、「夏夜」と「秋夜」の短夜と長夜

『和漢朗詠集』の項目が春秋対称であることは既に指摘されている。しかし項目だけでなく、採られている詩句も春秋の対称を意識して編集されていた。その一つとして

「春興」と「秋興」の色彩の対を採り上げたい。

「春興」は、野遊の楽しさを鮮やかな春の風景の中に詠んだ項目である。劉禹錫の句は、紅の錦のような花と碧の羅のような天の色の対で春の盛りを詠んでいる。

「春興」

一九 野草芳菲紅錦地 遊糸繚乱碧羅天

野草芳菲たり紅錦の地 遊糸繚乱たり碧羅の天 劉禹錫

「春興」では、さらにこの詩句を本説とする小野篁の詩句も採っている。

二二 着野展敷紅錦繡 当天遊織碧羅綾

野に着いては展べ敷く紅錦繡 天に当って は遊織す碧羅綾 小野篁

この紅と碧の色の対と対応する詩句が「秋興」巻頭に選ばれているのである。

「秋興」

二二 林間煖酒焼紅葉 石上題詩掃緑苔

林間に酒を煖めて紅葉を焼く 石上に詩を題して緑苔を掃ふ 白楽天

同じ紅と緑の色の対でありながら、光輝く鮮やかな色彩

と対称的に散った紅葉と日陰の湿った深緑の苔というくすんだ色彩である。色の対のみならず一人孤独に酒を飲み詩を詠む内容も仲間と野に出て酒を酌み交わし、詩作し合うという「春興」と対称的である。紅と緑の色の対の「秋興」冒頭の詩句は公任が、「春興」と対称的になるように、意識的に選んだ詩句と言える。対称的な内容で項目を編集する方針は、春秋に限らない。「夏夜」と「秋夜」の所収和歌も対を意識した編集がされている。

「夏夜」

一五三 夏の夜を寝ぬに明けぬといひおきし人はものを
や思はざりけむ

一五四 ほととぎす鳴くや五月のみじか夜もひとりし寝
れば明かしかねつむ

一五五 夏の夜の臥すかとすればほととぎす鳴くひと声
に明るしのめ

「夏夜」の和歌は「短夜」が基軸となっている。一五三番、一五四番、一五五番歌の三首の展開には関連性が見られる。一五三番で夏を短夜と言った人は物思いをしたことがないのであろうかと客観的に詠み、次の一五四番で一人寝では短夜でも長く感じると切実に詠み、最後の一五五番で寝たかと思えばもう夜明けと短夜そのものを詠む。『和

漢朗詠集』では、この「短夜」を主題とする「夏夜」和歌に、「夜長」を主題とする「秋夜」の和歌を対応させている。

「秋夜」

二三八 あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひ
とりかも寝む 人丸

二三九 むつ言もまだ尽きなくに明けにけりいづらは秋
の長しといふ夜は 躬恒

二三八番の長い長いこの秋の夜をたった一人で寝ることになるのだろうかと夜長を詠み、次の二三九番ではその長い夜でさえも恋人と一緒に語り尽くせないうちに明けてしまふと逆説的に秋の夜長を詠んでいる。また、主題だけでなく、共寝は夜長でさえ短く感じる「秋夜」二三九番と、一人寝をわぶる身には短夜でさえ長く感じる「夏夜」一五三番、一五四番は逆説的表現までも対応している。

但し「夏夜」は、漢詩句は「霜のような白い月の光」による納涼表現の作品が並び、和歌と漢詩句は別の世界を示しているのに対し、「秋夜」は「上陽白髮人」「長恨歌」等の悲恋の物語から夜長をわぶるという和歌と共通世界の漢詩句を集めている。

ところで、「両項目の和歌は典拠と関係なく、それぞれ前

の和歌の内容を受け展開性のある配列となっている。展開性のある配列は、他の多くの項目にも見られる。次にあげる「七夕」の和歌もその典型例である。

「七夕」

二二九 ひと年にひと夜と思へど七夕のあひ見む秋の限りなきかな 貫之

二二〇 年ごとに逢ふとはすれど七夕の寝る夜の数ぞすくなくかりける 躬恒

二二九番は一年に一度の会合であるが永遠に続くこと詠み、二二〇番は毎年必ず逢えるといつてやはり年に一度は少ないと詠んでいる。同じ状況をまったく逆に捉え、あたかも対話しているかのような二首である。この二首は典拠を異にする。二一九番は『拾遺集』歌、二二〇番は『古今集』歌である。共に『古今和歌六帖』の「七日の夜」にあるが、順も違い離れており、両首の内容から公任があえて並べ換えたと思われる。

以上、対称関係となる項目を比較することで、公任の編集方法を見てきた。次に項目と項目の繋がり、特に季の橋渡しとなる項目を見て行きたい。

二 春から夏へ「更衣」、夏から秋へ「扇」、秋から冬へ「擣衣」

『和漢朗詠集』の夏部の最初は「更衣」、次が「首夏」となっている。しかし『和漢朗詠集』の項目を設ける上で、重要資料とされた『古今和歌六帖』では夏部の最初は「はじめの夏」、次が「ころもがへ」となっていた。なぜ『和漢朗詠集』では『古今和歌六帖』と項目順を逆にしたのであろうか。

「更衣」

一四四 背壁残灯経宿焰 開箱衣帯隔年香

壁に背けたる灯は宿を経たる焰を残せり

箱を開ける衣は年を隔てたる香を帯びたり

白楽天

一四五 生衣欲待家人着生 宿釀当招邑老酣

生衣は家人の着せんを待たんとす 宿釀は

当に邑老を招いて酣なるべし

讚州作 菅

一四六 花の色に染めしたもとの惜しければ衣更へうき

今日にもあるかな

「更衣」とは、四月一日に衣のみならず設ひもすべて夏

用に一新する年中行事である。截然と夏に切り替わったことを意識させる日である点が、公任が夏部の始りの項目にした理由だと思われる。しかも「更衣」という項目は、春からの橋渡しという意味をも持つ。

一四四番の「宿を経たる焰」は、春の最後の日から夏の始まりである更衣の日にまたがって燃えている焰であり、「年を隔てたる香」は、夏のために衣の箱を開いたところいきなり香りが襲い去年の夏の出来事を思い出させ、夏の始まりである今日という日も、昨年を経ってきたのだという思いにさせる。一四五番は衣更の時期を間近にして家から夏衣が届くのを待ちながら、昨年の秋に仕込み春に熟して夏を迎える今飲み頃となった新酒を味わおうと夏に到るまでの時の経過を詠んでいる。一四六番も夏になったので春の象徴である花の色の衣を代えなければいけないのが惜しいという春の思い出を引きずっている。

これら三つの詩歌は、すべて何らかの形で前の季節や前の年を引き継いで夏を迎えている。「春最後の日の灯」「昨年の衣の香り」(一四四番)、「昨年から仕込んだ酒」(一四五番)、「春に染めた花衣」(一四六番) という前の季や年を経て夏に到ったという表現を可能にさせているのは、「更衣」という項目ならばこそである(注一)。公任は、夏の衣を準備をする「更衣」という行為に、春から夏へと移り変

わる季の橋渡しの役割を見出し、「更衣」項目を春部から夏部に移行するのにふさわしい項目として夏部冒頭に置いたのである。次に夏から秋の季の橋渡しをする夏部最後の「扇」項目を考察したい。

「扇」

一九九 盛夏不銷雪 終年無尽風

引秋生手裏 蔵月入懐中

盛夏に銷えざる雪 年を終ふるまで尽くる

ことなき風

秋を引いて手の裏に生る 月を蔵して懐の

中に入る 白楽天

二〇〇 不期夜漏初分後 唯翫秋風未至前

期せず夜漏の初めて分れて後 ただ翫ぶ秋

の風の未だ至らざる前 菅三品

二〇一 天の川川辺涼しき七夕に扇の風をなほや貸さま

し 七夕扇合 中務

二〇二 天の川扇の風に霧はれて空澄み渡る鶴の橋

同前 元輔

二〇三 君が手にまかする秋の風なればなびかぬ草もあ

らじとぞ思ふ 中務

一九九番は白楽天の「白羽扇」(三二一一) 詩を典拠と

する。^(注二)この背景には、成帝の寵愛を受けた証である豪華な白絹の扇を賜わりながら、趙燕飛姉妹に寵愛を奪われた班婕妤の「怨歌行」が背景にある。^(注三)続く二〇〇番の詩句の原典は残っていないが、『私注』により「動_レ輕扇明月」という詩題が知られる。扇を月に喩えていることから白く団扇形をしていることがわかり、発想の源に「怨歌行」があることがわかる。

班婕妤の「怨歌行」の影響を受けながら、表向きは一九番「引_レ秋生_三手裏」、二〇〇番「唯_レ翫秋風未_三至_前」と、扇の風を「秋風」とたとえる。二〇一番、二〇二番の和歌は、逆に七夕の「秋風」を「扇の風」にたとえている。最後の二〇三番の「君の手にまかせる秋の風」という表現は、最初の一九九番の「引_レ秋生_三手裏」という表現と一致し、「扇」部内の和漢の融合を意図した配列となっている。もともと二〇三番は、『論語』「顔淵篇」の「君子の徳は風、小人の徳は草、草之に風を上ふれば必ず偃_ふす」を典拠とした徳政を讃える歌、漢籍でいうところの「仁風」を和歌にしたものであった。^(注四)しかしこの歌は風に草木がなびくという徳政に重点が置かれるのではない。君の手によって秋の風を呼び起こし、季を夏から秋に変えるというところに重点が置かれた歌であろう。「扇」の最後の歌だけではなく、「夏」部の最後の歌として「君の手」によって風が起こり、

夏から秋に変えられるものだという公任の意図なのである。公任は「扇」に、班婕妤の扇をあえて表に出さず、扇の風を秋風にたとえた漢詩句を採用して、初秋に自然と繋がる展開になるように編集している。寵愛を失って捨てられる班婕妤と、夏に重用された扇が秋になると捨てられる「厭_あき」と「秋」を懸ける意味も裏に込めて、「扇」を夏部の終わりに配置したと思われる。^(注五)「扇」は、『和漢朗詠集』を踏襲した『新撰朗詠集』に唯一採られなかった特殊な項目である。そこに夏から秋に季の橋渡しをさせようという編集者公任の独自の工夫があった。

季の繋がりには秋から冬にも見られる。秋の終わりに「搗衣」を置き、冬衣の準備という形で秋から冬に渡しているのである。「搗衣」の巻頭は次の詩句である。^(注六)

「搗衣」

三四五 八月九月正長夜 千声万声無了時

八月九月正に長き夜 千声万声了_やむ時なし

白樂天

「八月、九月」の夜長に、近づく冬に備え砧を搗つ詩句は、続く冬部冒頭の「初冬」の「十月」詩句との関連性を十分意識した編集といえる。^(注七)

「初冬」

三五一 十月江南天氣好 可憐冬景似春華

十月江南天氣好し 憐れぶべし冬の景の春

の華かなるに似たることを 白楽天

又、「初冬」の和歌も十月を強調し、冬の始まりを詠む内容である。

「初冬」

三五五 神無月降りみ降らずみ定めなきしぐれぞ冬の初

めなりける

このように『和漢朗詠集』の構成は、春から夏、夏から秋、秋から冬へと繋がる項目配列と内容になっている。

以上、季から季への橋渡しとなる項目を公任が意識的に設けているだけではなく、そこに採った詩歌も季から季へと自然な形で橋渡しができる内容を選ぶ工夫が見られた。

さらに、項目内での詩歌の配列を細かく見ることで、公任の編集上の工夫を見て行きたい。

三 「霞」の「かすみ」と「霞」

項目内の配列を考える上で、まず「霞」項目を分析したい。「霞」は『拾遺集』によって春の歌材として初めて歌群が集められ、しかも巻頭に置かれた『和漢朗詠集』編纂

時注目の素材であり、公任としても春部に欠かせぬ項目と判断したと思われる。しかし和語「かすみ」と漢語「霞」とでは、示す対象が異なる。和語「かすみ」は、春たなびく白っぽい靄状のものを示すのに対し、漢語「霞」は、赤色を主とする色鮮やかな採光を示す。まったく異なる対象を詠んでいる詩歌を一つの項目として融合させるために公任はどのような工夫をしているのであろうか。

七五 霞光曙後殷於火 草色晴来嫩似煙

霞の光は曙けてより後火よりも殷し 草の色は晴れ来て嫩くして煙に似たり 白

七六 鑽沙草只三分許 跨樹霞纒半段余

沙を鑽る草はただ三分ばかり 樹に跨る霞は纒に半段余 菅

七七 昨日こそ年は暮れしか春がすみ春日の山にはや

立ちにけり 立春日 人丸

七八 春がすみ立てるやいづこみよしのの吉野の山に

雪は降りつつ

七九 朝日さす峰の白雪むら消えて春のかすみはたなびきにけり 兼盛

中国では「霞」は赤色を主とする採光の意であるから、本来は季節を問わない。一方、わが国では、『和漢朗詠集』編集時、「霞」は早春の歌材として認識されていた。七五

番の原典は、白楽天の「早春憶蘇州寄夢得」であり、これは早春の風景を詠んだものだが、『千載佳句』は赤い光と緑の草の色の対比に注目し、七五番の詩句を「春興」の項目に採っている。公任が数ある霞詩の中でこの句を採録したのは、原典の詩題が早春だからだけではないように思う。^(注三〇)

採録した最大の要因は、七六番「鑽沙草只三分許、跨樹霞纒半段余」の道真の詩句にあるように思われる。

この道真の詩句は各種朗詠譜本に見られず、また道真には、他に多くの「霞」を詠んだ詩句があるにもかかわらず、あえて選んだ理由は、公任が、同じ項目内で七六番の詩句が七五番の詩句を基に作られているという作呂品解説をしたかったためではないだろうか。(尚、本稿ではこのような発想の基になった漢詩句を以降、便宜上、「本説」と表現させて頂く。)

七五番と七六番は、ともに早春を詠んでいるだけでなく、「霞」に「草」を番わせるといふ発想が同じなのである。

白楽天の赤い霞に対して道真の錦の霞、それに番わせるのが、白楽天の煙に似た柔らかい若草に対して道真の砂地を割って芽を出したばかりの草とそれぞれ対応している。

七六番は『菅家文章』『同賦春浅帯輕寒、応製。勅初餘魚虚。』が出典である。道真が「春浅帯輕寒」とい

う題を与えられた際、白楽天の「早春憶蘇州寄夢得」(二二〇九)の、「霞光曙後殷於火、草色晴来嫩似煙」の詩句が浮かび、「鑽沙草只三分許、跨樹霞纒半段余」の詩句を作ったのであろう。但し、道真の詩句は、単に白楽天の模倣ではない。白楽天の詩句を踏まえた上で、それよりも早い春を詠んでいた。道真の詩句は、春が浅いことを「草」は全体の十分の三程度しか伸びていない、「霞」はまだ半分と割合によって表現したところに独自性がある。

「霞」が「半段余」であるから早春だといふ発想は、中国漢詩には見られない。この発想の前提には、春が来ると「かすみ」に包まれるという日本の季節観がある。「春浅帯輕寒」の題を与えられた時、道真は白楽天のこの詩句を思い浮かべ、それより早い春を詠んだのである。白楽天の空一面を燃やす紅の朝焼け、あたり一面を包み込む柔らかい煙る緑に対して道真の色彩は極めてわずかなものに過ぎないがその印象は鮮烈である。沙から短い錐のような緑の線、木々がまだ芽吹かず何の色彩もない梢の間に、わずかではあるが鮮やかな光があるのを春の兆しとして受けとめたのは日本人ならではの感性であろう。道真は和語「かすみ」とは違う漢語「霞」の意味を正しく使いながら、日本的美意識に基づいた春を詠んだのである。公任は、道真の詩句を高く評価し、『和漢朗詠集』「霞」に採録し、その

本説詩句として七五番の「霞光曙後殷於火、草色晴来嫩似煙」を「霞」項目冒頭に据えたのであろう。

和歌三首の冒頭七七番「昨日こそ年は暮れしか春がすみ春日の山にはや立ちにけり」歌は、『拾遺集』所収歌であるが、公任が編纂した『拾遺抄』には選ばれていない。

『拾遺抄』では「霞」歌群に採用されなかつた七七番歌は、『和漢朗詠集』の「霞」では基軸となる重要な和歌となっている。公任は明らかに『拾遺抄』を撰じる時とは別な価値観で和歌を選んでい^(註二)る。

では、『和漢朗詠集』「霞」項目の和歌の選択基準とは何であろうか。まず明らかなのは、ここに並んでいる三首が密接な連続性を持つという点である。

共通して「春がすみ」という歌語を用い、七七番を起点に、七八番では「春がすみ立てるやいづこみよしのの吉野の山に雪は降りつつ」と、七七番の「春がすみ春日の山にはや立ちにけり」に対して、あたかも七八番が「春がすみ立たったって、いったいどこに。ここみよしのの吉野の山には雪は降っているのに。」と疑問を投げかけているような配列である。その次に置かれた七九番「朝日さす峰の白雪むら消えて春のかすみはたなびきにけり」は、『古今和歌六帖』にも勅撰集にも採られていない。この歌を、公任が敢えて選んだ。七八番の「みよしのの吉野の山に雪は降

りつつ」の「山の雪」という素材を、七九番が「朝日さす峰の白雪むら消えて」と引き継いでいる。そして最終的に「春のかすみはたなびきにけり」として「霞」を終えている。

七九番歌の風景は、「春めいた朝日のさしている峰の白雪」という朝焼けの中の霞というものであり、公任はこの歌によって、鮮やかな朝焼けの「霞」と白くたなびく「かすみ」という別種のもを一つの世界に取り込んでいる。

ここに採られている三首は、原典の歌集の著名度や、典拠内での扱いを無視しても、和と漢の美意識の融合という『和漢朗詠集』の独自の世界のために公任が選んだ三首である。その選択基準は、連続する三首が連想によって結ばれ、それによって一つの世界を形作ることであった。そしてその作り上げた和歌の世界は、漢詩句の世界と融合することを最終的な目標にしているように見える。

四 「花橘」の実と花

前章では、採光を意味する漢語「霞」と白い靄状のものを指す和語「かすみ」という本来異なる対象を詠んだ漢詩句と和歌を結びつける公任の苦心を見てきた。夏部「花橘」項目においても、中国漢詩では主に実を詠み、和歌においては平安以降、専ら花を詠んでいるという問題を抱えてい

た。

「花橘」

一七一 廬橘子低山雨重 楸栢葉戰水風涼

廬橘子低りて山雨重し 楸栢葉戦いて水風涼し

白楽天

一七二 枝繫金鈴春雨後 花薰紫麝凱風程

枝には金鈴を懸けたり春の雨の後 花は紫麝を薰ず凱風の程

後中書王

一七三 五月待つ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする

香ぞする

一七四 ほととぎす花たちばなの香をとめて鳴くは昔の人や恋しき

人や恋しき

橘は、「橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどいや常葉の木」(万葉集・一〇一四)の歌にあるように常緑の木でありその実是不老不死の「時じくの香の木の実」と呼ばれた。『万葉集』には実も詠まれていたが、『古今集』以降は、花を詠むのが主となった。『和漢朗詠集』編集時は、『古今集』「五月待つ花たちばなの香をかげば」歌の強い影響下、橘といえは初夏に咲く白い花の香りを詠むのが常識となっていた。項目名の「花橘」も「花の咲いている橘」の意(注二〇)。「花橘」も「花の咲いている橘」の意(注二〇)。また橘の花を賞している語」(『日本国語大辞典』)

であり、花を意味していた。「花橘」項目には橘歌の代表歌「五月待つ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする」を欠かせない。さらにこの歌を本歌とし、橘をよすがとする郭公を加えた「ほととぎす花たちばなの香を求めて鳴くは昔の人や恋しき」歌を加え、これらの和歌に合わせる形で漢詩句を撰んでいる。この様な花を詠む和歌に番わせる中国漢詩句は実の用例ばかりであり、公任は同じ項目に配列するのに苦慮したと思われる。その中で、公任が撰んだのは、『千載佳句』「秋興」に所収された白楽天の「廬橘子低山雨重、楸栢葉戰水風涼」の詩句であった。この詩句の「廬橘」については、枇杷説、金橘説等、従来から実態がはっきりされてこなかった。現行『和漢朗詠集』注釈書では、夏蜜柑説が有力であるが、これもこの詩句が夏部の「花橘」の詩句であることへの整合性による解釈の可能性がある。なぜ、公任は、他の橘中国漢詩ではなくそれまで秋の詩句と認識され、その上、正体のはっきりしない「廬橘」詩を撰んだのだろうか。その理由は一七二番の「枝繫金鈴春雨後、花薰紫麝凱風程」という具平親王の詩句にあると思われる。この詩句は平安時代よく知られており、『枕草子』三四段「木の花は」にも利用されていることが指摘されている。

四月のつごもり、五月のついたちのころほひ、橘の葉の

五 文学史的展開「閏三月」

濃く青きに、花のいと白う咲きたるが、雨うち降りたるつとめてなどは、世になう心あるさまに、をかし。花の中より黄金の玉かと見えて、いみじうあざやかに見えたるなど、朝露に濡れたる朝ぼらけの桜に劣らず。郭公のよすがときへ思へばにや、なほさらにおひべうもあらず。(注五)

四月の晦日、五月の一日の頃、雨の中、白く咲く花と黄金の玉のような実が鮮やかに見えるという内容は、一七二番の具平親王の上の句で「春雨の後、熟して枝に金の鈴をかけたような実を詠み、下の句で夏の南風に匂う橘の花の香を詠んでいる」という内容と一致する。恐らく具平親王も花を詠むのが一般となっていた平安時代に橘詩を詠むことに苦慮し、花と実を同時に詠んだのであろう。邦人漢詩句で橘を詠む用例は少なく、(注七)その中で詠まれたこの詩句は高く評価されたと思われる。公任は、この詩句に、実を詠む中国漢詩と花を詠む和歌の橋渡しとしての役目を見出したのであろう。そしてこの一七二番の「枝繫_ニ金鈴_ニ春雨後、花薰_ニ紫鸞_ニ凱風程」詩句の発想の源となったのが、一七一番の白楽天の「廬橘子低山雨重、楸梧葉戰水風涼」詩句である。公任は、一七二番の具平親王の詩句を採録する際、同時にこの詩句が詠まれた背景となる中国漢詩を本説として示し、冒頭に掲げたのである。(注八)

前章では、「花橘」項目の一七一番の白楽天の詩句が、一七二番の具平親王の詩句の本説であることを示していると推測した。「霞」項目においても、七五番の白楽天の詩句が、七六番の道真の詩句の本説指摘になっていると述べた。このように『和漢朗詠集』には和歌や本朝漢詩句の本説指摘するために作られたと思われる項目がある。春部の「閏三月」である。

『和漢朗詠集』の構成は、『古今集』を意識したものであるが、(注九)『古今集』の春部は弥生晦日で終わるのに対し、『和漢朗詠集』は春部は、弥生晦日に該当する「三月尽」の後にさらに「閏三月」を設けている。「閏三月」は、『千載佳句』『古今和歌六帖』など先行典拠本には見られない項目であった。(注一〇)

『和漢朗詠集』は、「立春」に対して「立秋」、「早春」に対して「早秋」、「三月尽」に対して「九月尽」のように、春と秋がほぼ対称的に構成されている。(注一一)その中で「閏三月」には、対応すべき「閏九月」がない。「閏三月」項目は公任が春秋の対称を壊してまでも設けた項目であった。公任の意図が「あまりの春」という題材の発生と文学史的展開を提示することであったと以前論じたことがある。(注一二)ここで

簡単に振り返りたい。「閏三月」項目の内容は以下の通りである。

「閏三月」

五九 今年閏在春三月 剩見金陵一月花

今年の閏は春三月に在れば 剩あまつさへ見る
金陵一月の花を 陸侍御

六〇 帰溪歌鶯 更逗留於孤雲之路

溪たにに帰る歌鶯は 更に孤雲の路に逗留し

辞林舞蝶 還翩翩於一月之花

林を辞する舞蝶は 還かへつて一月の花に翩翩
たり 順

六一 花悔帰根無益悔

花は根に帰らむことを悔ゆれども悔ゆるに
益なし

鳥期入谷定延期

鳥は谷に入らむことを期すれども定めて期
を延ぶらむ 清原滋藤

六二 さくら花春加はれる年だにも人の心に飽かれや

はする 伊勢

全て春が季節がまる一と月延長される喜びを詠んでいる。
『和漢朗詠集』編纂時、著名だったのは六二番の「さくら

花」の伊勢歌だった。この歌は、「やよひにうるふ月ありける年詠みける」という詞書を持つ、延喜四（九〇四）年閏三月の際の歌と考えられるが、『古今集』では、「花」の歌群に採られ、桜の花の歌として認知されていた。

公任は、この歌を「閏三月」項目の和歌として採ること
で、「春加える年」の句に重点を置き、余りの春歌として
あらたな評価を与えたことになる。この歌の本説は、五九
番の陸侍御の詠作「今年閏在春三月、剩見金陵一月花」
である。

この詩句は現在の全唐詩には見られず、『千載佳句』に
収められているのみである。『千載佳句』では「雑花」項
目所収であったこの詩句を公任は『和漢朗詠集』「閏三月」
部の最初に置いた。そしてこの詩句は、六二番歌のみなら
ず、六〇番の「帰溪歌鶯、更逗留於孤雲之路」、六一番
の「花悔帰根無益悔、鳥期入谷定延期」、両詩句
の本説でもある。両詩句は、九六一年閏三月の同じ宴の際
詠まれたものと考えられるが、（注三四）両詩句の詠作の際には五九番
「今年閏在春三月、剩見金陵一月花」の詩句以上に『古今
集』歌である六二番の「さくら花」歌を意識して詠んだと
思われる。公任は、この詩句の詠作背景に気付き、五九番
の詩句を本説とする文学史展開を示すために「閏三月」項
目を設けたのである。

六 再発見の紅「躑躅」

本来は「花」の詠として認知されていた「さくら花春加はれる年だにも人の心に飽かれやはせぬ」の伊勢歌を新たに「余りの春」歌として再評価したように、公任が旧来の価値観を覆し、新たな評価を提示した例として「躑躅」項目を見て行きたい。

『和漢朗詠集』の春部は、「立春」から「閏三月」まで春の推移を追った後、「鶯」「霞」等の素材を並べている。ほとんどが『古今集』以来の三代集に認知された伝統的な歌材である中で春部の終わりには、藤や款冬とともに躑躅が選ばれている。躑躅は三代集に季節詠として詠まれてこなかった素材であるが、『和漢朗詠集』の春部に項目として選ばれて後、『後拾遺集』『金葉集』では、春部の終りに藤や山吹とともに詠まれるようになった、いわば『和漢朗詠集』が春の季材としての評価を決定つけた素材であるといふ以前論じることがある。^(注三五)しかし、『和漢朗詠集』「躑躅」項目に採録された詩歌は、それ以前から別の観点から評価されてきた旧知のものであった。

「躑躅」

一三七 晚藥尚開紅躑躅 秋房初結白芙蓉

晚藥すずはなほ開けたり紅躑躅 秋の房は初めて結ぶ白芙蓉 白楽天

一三八 夜遊人欲尋来把 寒食家応折得驚

夜遊の人は尋ね来つて把らんとす 寒食の家には折り得て驚くべし 順

一三九 思ひいづるときはの山の岩つつじ言はねばこそ

あれ恋しきものを

一三七番の「晚藥尚開紅躑躅、秋房初結白芙蓉」の詩句は「千載佳句」に採られている。但し『千載佳句』では「つつじ」項目ではなく「早秋」項目に採られていた。この詩句は、春の紅のつつじ詩句としてではなく、秋の白芙蓉の詩句として認知されていた。^(注三五)

『千載佳句』にも「つつじ(山石榴)」項目があり、そこには、白楽天の「風嫋舞腰香不尽、露銷粧臉淚新乾」という詩句が採られていた。それにも関わらず、秋の白芙蓉の詩句としてされていた詩句をあえて「躑躅」項目冒頭に選んだのは「紅躑躅」の「紅」の文字のためであったと思われる。『和漢朗詠集』春部は、躑躅の他、山吹、藤の三季材の取り合わせとなっているが、それぞれの項目の冒頭詩句を並べると次のようになる。

山吹の「春風吹散櫻吹雪、山吹花開紅似霞」の詩句は、春の季材として認知されていた。山吹は、『和漢朗詠集』春部に採られていた。山吹は、『和漢朗詠集』春部に採られていた。山吹は、『和漢朗詠集』春部に採られていた。

「藤」

一三三 悵望滋恩三月尽 紫藤花落鳥関々

悵望す滋恩に三月の尽きぬることを 紫藤
の花落ちて鳥関々たり 白楽天

「躑躅」

一三七 晚藥尚開紅躑躅 秋房初結白芙蓉

晚藥はなほ開けたり紅躑躅 秋の房は初め
て結ぶ白芙蓉 白楽天

「款冬」

一四〇 点着雌黄天有意 款冬誤綻暮春風

雌黄を点着すること天意あり 款冬誤て暮
春の風に綻ぶ 清慎公

「藤」昌頭の「紫藤花落鳥関々」の「紫藤」、「躑躅」の「晚藥尚開紅躑躅」の「紅躑躅」、「款冬」の「点着雌黄」天有「意」の「雌黄」の紫、紅、黄色の色彩を表す詩句を意識してそれぞれの項目の冒頭に置いている。この「紅」という文字を欲した故に、「つつじ」を表現する漢字に『千載佳句』で用いられた「山石榴」ではなく、「躑躅」の採用したのではないだろうか。公任のこの選択は、『和漢朗詠集』の影響を受けた『堀河院百首』や和歌の結題等で

躑躅が用いられることによりさらに一般化されて行く。

春部の彩りとして紅色を欲した公任は、従来「白芙蓉」

の詩句として知られていた一三七番の中の「紅躑躅」にそれを求めた。一三七番によって強調された「紅」を軸に

「躑躅」は展開して行く。一三八番は躑躅があまり紅色が鮮やかなので、夜散策する人が灯火に見誤ってしまい、同じように火を使つてはいけない寒食の日に、禁断の火に見誤つて驚くであろうと火を暗示させることにより、燃え上がるような紅色が浮かび上がる。

続く一三九番の躑躅が紅であることは「思ひいづるときはの山の郭公唐紅の振り出でてぞ鳴く」（古今・夏・一四八）の唐紅の血を吐くように鳴く郭公歌から明らかであり、「思ひいづる」の「ひ」に、炎の「火」が込めてあることは以前から指摘されていた。

しかし一三九番は春の歌としてではなく、「言はねばこそあれ恋しきものを」つまり口に出さないからこそ恋しい恋の歌として『古今集』に収められていた。しかし『古今集』での歌の配列を見ると「思ひいづるときはの山の岩つつじ」（恋一・四九五）歌は「山高み下行く水の下にのみ流れて恋ひむ恋ひは死ぬとも」（恋一・四九四）という密かに慕う「思ひ」の火を共通要素として次に置かれていた。そしてこの歌の次に「人知れず思へば苦し紅の末摘花の色

に出でなむ」(恋一・四九六)「秋の野の尾花にまじり咲く花の色にや恋ひむ逢ふよしをなみ」(恋一・四九七)と忍ぶ思いの炎は、ついに表に現れ末摘花によって染まる紅色を放つ。この配列の中から読み取れる「思ひいづる」歌の岩つつじも紅色である。

「躑躅」項目の配列の中でこの和歌を改めて見ると、一三七番「晚葵尚開紅躑躅、秋房初結白芙蓉」の白楽天の紅色のつつじ、一三八番に「夜遊人欲尋来把、寒食家応折得驚」の源順の紅燃えるつつじに続き、恋の炎の「火」色、紅色のつつじの和歌として一三九番に「思ひいづるときはの山の岩つつじ言はねばこそあれ恋しきものを」が置かれている。公任は恋の歌として知られたこの歌の紅色に注目し、紅色の和歌としてこの歌を選んだのである。『和漢朗詠集』「躑躅」項目は紅色によって統一されている。『和漢朗詠集』以降「後拾遺集」「金葉集」では、春部の巻末に「藤」「山吹」とともに「つつじ」の歌群が置かれるようになる。また、「つつじ」の結題の表記は、専ら「躑躅」を用いた。これも『和漢朗詠集』の影響である。

しかし、本稿では詳しく採り上げなかったが、『和漢朗詠集』の項目を立てる際、まず基本としたのが、三代集で

の歌材の扱い方であった。中国では詠まれることがないが、和歌の世界では欠かせない春の「山吹(款冬)」、秋の「萩」等の歌材は、中国漢詩の用例を掲げることができなくともあえて項目を設けていること等がその現れである。

また「郭公」の項目では、郭公(杜鵑)中国漢詩は数多くありながら、中国では死を暗示させる内容の詩が多いため公任はあえて採録していない。公任が選んだ「郭公」項目の中国漢詩句は『千載佳句』で「早秋」項目に採られていた「一声山鳥曙雲外」(和漢朗詠・郭公・一八二)であった。公任はこの詩句の内容がほととぎす歌の詠みぶりと同と判断したのである。これも『和漢朗詠集』が和歌の価値観に重きを置いていることを示している。また、日本と中国で季の違う、郭公(中国では春)、蜚、蟬(共に中国では秋)も日本の季節感に合わせた分類をしている。

以上、「和漢朗詠集」の編集方法について、項目の立て方や、項目内における詩歌の配列から見えてきた。そこに見えてきたのは、和漢の異なる素材を一つの項目に調和させ、三代集を超える新しい美意識を呈示しようとした公任の創意工夫であった。そしてそれは、『堀河院百首』『後拾遺集』を始め、後世に少なからず影響を与えたのである。

中でも触れている。

(一) 『和漢朗詠集』所収詩歌は院政期以降、説話、軍記の文飾や、和歌の本歌、本説として用いられた。特に『堀河院白首』は積極的に利用し、それを通して以降の和歌に大きな影響を与えた。(松野陽一氏「組題構成意識の確立と継承——白河院期から崇徳院期へ——」『文学語学』七〇号、昭和四九年一月)

(二) 『和漢朗詠集』「閏三月」部について『和漢比較文学』第一八号、平成九年二月。「秋はなほ夕まぐれこそただならね萩の上風萩の下露——和漢朗詠集の秋の夕(秋興・秋晩)——」(『京都語文』第三号、平成一〇年十二月)、『和漢朗詠集』躑躅部成立の背景——王朝の色彩美——(『和歌解釈のパラダイム』笠間書院、平成十年十一月)、『和漢朗詠集』「扇」部の背景——公任の四季の構成意図——(『甲南国文』四七号、平成十二年三月)。

(三) 三木雅博氏『和漢朗詠集とその享受』(勉誠社、平成七年九月)。

(四) 引用した『和漢朗詠集』は大曾根章介氏・堀内秀晃氏校注『和漢朗詠集』(新潮社、昭和五十八年九月)。和歌は『新編国歌大観』によったが、漢字表記は適宜、私が改めた。

(五) 「秋興」の主題は「大底四時心愁苦、就中腸断是秋天」(二二三・白楽天)の詩句であり、「秋興」項目の詩句はこの詩句の影響下なのが三詩句(二二四・二二五・二二六)と、秋の異名の「商」や「白」を詠むものが(二二二・二二七)二詩句ある。猶、「秋興」冒頭と「春興」の色対については、注(二)の拙稿「秋はなほ夕まぐれこそただならね萩の上風萩の下露——和漢朗詠集の秋の夕(秋興・秋晩)——」

(六) 一五三番は、『和漢朗詠集』以外、勅撰集及び『古今六帖』にも採られず、「夏夜」項目を編集するために公任が特に必要を感じた歌と思われる。

(七) 二三八番は『万葉集』(二八一三)、『拾遺集』では「恋三(七七八)に『古今六帖』では「山ととり」(九二四)で採られていた。一方、二二九番は、『古今集』では雑体(雑体・誹諧歌・一〇一五)、『古今六帖』でも「ふせり」(二七三三)とまったく異なる項目に採られている。

(八) 『和漢朗詠集』「夏夜」の漢詩句は、一五〇番「月照三平沙」夏夜霜、一五一番「月照松台上行」、一五二番「深更軒白月明初」と「白い月光」が基軸となっている。

(九) 『古今六帖』「七日夜」では貫之歌が一五四番、躬恒歌が一四八番と離れ順も逆になっている。

(一〇) 『千載佳句』では「首夏」はあるが「更衣」はない。『和漢朗詠集』の項目が、『千載佳句』及び『古今六帖』の影響を受けている点については、注(三)の三木雅博氏の御著書に詳しい。

(一一) 一四四番の原典は『白氏文集』「早夏曉興、贈『夢得』」(三三六〇)であるが、『千載佳句』では「首夏」に採られている。

(一二) 一九九番は『千載佳句』に採られていない。

(一三) 班婕妤作「怨歌行」は「新製齊茨素、皎潔如『霜雪』。裁為『合歡扇』、团团似『明月』。出入君懷袖、動搖微風發。常恐秋節至、涼風奪『炎熱』。弃捐篋笥中、恩情中道絶。」対して「白羽扇」は、「素是自然色、因因裁製功。颯如『松起』籟、飄似『鶴翻』空。盛夏不銷雪、終年無『尽風』。引秋生『手』

裏、蔵し月入懐中。一略—であり、「盛夏不銷雪」等の表現は、「怨歌行」を連想させる。注(三)の拙稿『和漢朗詠集』「扇」部の背景」参照。

(一四) 二〇一番と二〇二番は、天禄四年円融院が負態に七月七日に扇を奉られた際の歌で、牽牛・織女の逢瀬に「扇(逢ふぎ)」を懸けていると思われる。両首は『拾遺集』雑秋に連続して採られている(一〇八八・一〇八九)が、『拾遺抄』では、二〇一番歌は秋に採られているが、二〇二番歌は採られていない。一方、『古今六帖』「あふぎ」に二〇二番は採られたが、二〇一番は採られていない。二〇三番は、中務集にしか収められていない。公任は、これら典拠を異なる三首を、涼しい扇の風が秋を呼び込み、夏から秋へ渡すという『拾遺抄』とは別な観点で選んでいる。

(一五) 注(一三) 拙稿参照。

(一六) 『白氏文集』(二二八七)「聞夜砧」を典拠とし、『源氏物語』「夕顔」にも引かれよく知られていた。『古今六帖』「服飾」部に「衣うつ」があり、『和漢朗詠集』「擣衣」の三五二番「唐ころも」歌が採られている。しかし「擣衣」「衣うつ」は、もともと征旅の夫を思う妻を詠む中国詩の主題であり、和歌も漢詩的色彩の強く、『古今集』以降あまり詠まれなくなっていた。しかし公任は、晩秋に冬への準備をする「擣衣」という主題は、秋から冬への橋渡し項目としてふさわしいと判断し、『和漢朗詠集』秋部巻末に設けたのである。『和漢朗詠集』以降、「擣衣」は再び、歌題として定着し、『堀河院百首』等に詠まれて行く。

(一七) 『白氏文集』(二三八六)「早冬」を典拠とし、『千載佳句』には採られていない。

(一八) 『後撰集』冬(四四五)、「古今六帖」は「つふゆ」(二〇九)に収められている。

(一九) 和語「かすみ」と漢語「霞」も差異については、小島憲之氏「上代に於ける詩と歌——「霞」と「霞」をめぐる——」(『松田好夫先生追悼論文集、万葉学論攷』平成二年四月、統群書類従完成会)や、柳沢良一氏「和漢朗詠集を読む——「霞」と「かすみ」(『国文学』第三四卷第十号、平成元年八月)が詳しい。上代における「かすみ」歌は春にかぎるものでなく、色彩も赤味を帯びたものも詠まれる。安田徳子「歌語「かすみ」成立と「霞」——四季感と色彩感に注目して——」(『和漢比較文学』第五、平成元年十一月)。緑の霞について川村晃夫氏「詩語と歌語のあいだ——霞の色をめぐる——」(『國學院雜誌』九五卷十一号、平成六年十一月)が詳しい。以上の問題については、拙稿「日本漢詩における「霞」の解釈について——『新撰朗詠集』『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』を中心に——」(『和漢比較文学』第十四号、平成七年一月)、「浅緑の霞について——和漢朗詠集一碧羅」と千載佳句「碧煙——」(『史料と研究』第二四号、平成七年三月)参照。

(二〇) 安田徳子氏はこの詩句が採られたのは、「霞」が早春の景物として詠まれている和歌に合せ採録されたのでであろうと指摘されている。注(一九)参照。

(二一) 七七番歌は「拾遺集」の春三番歌であるが、前二首は「拾遺抄」に採られているが、この和歌は採られておらず、ここも勅撰集とは違う編集方針が見られる。

(二二) 「万葉歌人にとって、橋は漢籍が必要条件ではなかった」等、万葉歌と平安和歌、及び中国漢詩、日本漢詩の橋詩歌の

問題については、山元有美子氏「万葉的橘と古今的橘」『王朝——遠藤嘉基博士古稀記念論集——』（洛文社、昭和四十九年五月）に詳しい。

(二三) 『十卷本和名抄』には「橘兼名苑云橘〔居蜜反〕一名金衣〔太知波奈〕菓木又菓名」とあり、平安末「観智院本類從名義抄」に「廬橘」の見出しがあり、「ハナタチバナ」の訓がある。『和漢朗詠集』諸注釈は以下の通りである。川口久雄氏は「夏蜜柑」。(岩波日本古典文学大系和漢朗詠集、昭和四〇年一月)。大曾根章介氏は「夏蜜柑」とするが「和漢朗詠集鈔」の「一説として枇杷の意という」も紹介。(『新潮日本古典集成和漢朗詠集』昭和五八年九月)。金子元臣氏は『和漢三才図説』を引き金柑や夏蜜柑と同種とし、枇杷と別物とされる。(『和漢朗詠集新釈』明治書院、明治四三年七月)。柿村重松氏は、「夏蜜柑」とし、語釈として前漢司馬相如の上林賦の用例「文選、上林賦云、廬橘夏熟、黄甘橙棽、枇杷燃柿、注云応劭曰、伊尹書曰、箕山之東、青鳥之所_レ有、廬橘夏熟」を引く。(『和漢朗詠集考証』パルトス社、大正一五年四月)。菅野禮行氏は「金柑説」で「上林賦」紹介。(『新編日本古典全集和漢朗詠集』平成十一年十月)。「廬橘」の中国詩からの語釈については、植木久行氏『和漢朗詠集』所収唐詩注釋補訂(五)(一九九二年十月)『中国詩文論叢』第十一集に詳しい。大まかに言えば、漢・晋の廬橘は金柑属の一種で、唐・宋以後は、枇杷という傾向にあるとされ、戴叔倫「湘南即時」(『三體詩』卷一)「廬橘華開楓葉衰」と白居易の本詩についての「晩秋に花がひらき梅雨ごろに実が重い果物は、たとい橘の名がついてはいても、ミカンのたぐいではなく、ピワとみるほうが自然だろう。かりにミカン類と

しても夏ミカンにちかいいもので、キンカンではなさそうだ。」の記事を紹介し、「かくて、謎にみちた廬橘に対して、一方では文字づらから「廬き橘」を求めつつ、他方では「夏熟」の語に着目して「後世遂に多く枇杷と為す」(清の張雲傲『選学膠言』巻五)の結果になったわけである。」として枇杷説をやや有力と紹介している。

(二四) 例えば「白氏文集」「棟貢橘書情」(二四四一)等、白楽天の橘詩は他にもある。

(二五) 増田繁夫氏校注『和泉古典叢書枕草子』(和泉書院、昭和六十二年十一月)。

(二六) 橘は「郭公のよすが」となるという文のとおり橘の歌の展開として公任は、一七三番に郭公を加えた一七四番「ほととぎす花たちばなの香をとめて」を撰んだのであろう。

(二七) 日本漢詩では橘をあまり素材としない。具平親王の詩句と『本朝文粹』所載の「遠久良養生方」(兼明親王)のみであることが、注(二二)の山元論文参照。

(二八) 公任が「廬橘」詩句を『和漢朗詠集』「花橘」に採った理由を、院政期の歌学書『和歌重蒙抄』において藤原範兼が、「御覽三百十一」に云、橘部曰、李廣七類曰、梁土青裏、廬橘是生三金衣、素裏斑斑理内家。されば又花橘にあらずといはむこといかがおぼゆ。橘にはあらでにたらむものを御覽橘部には、まさにいるべからぬこと也。此をみて四條大納言朗詠集には廬橘子低と云へる詩をばいれたるにや。(第七木部「花橘」と推察していた。但し、範兼が云う「御覽」こと『修文殿御覽』は現在逸書である。

(二九) 注(三)三木雅博氏『和漢朗詠集とその享受』に指摘されている。

(三〇) 『古今六帖』の「うるふ月」は、閏月の和歌を三月から二月まで月順に集めたものであり、「余りの春」の閏三月の和歌とは別な観点で設けられている。

(三一) 注(三) 三木雅博氏『和漢朗詠集とその享受』参照。

(三二) 注(二) 拙稿『和漢朗詠集』「閏三月」部について参照。

(三三) 『千載佳句』「雑花」「送淮南李中丞」という詩注で収められている。

(三四) 六〇番は、『本朝文粹』巻八、詩序一、時節部「後三月陪都督大王華亭、同賦・今年又有春、各分一字、応」教」

(巻八・詩序・時節)の一節である。そして六一番も『和漢朗詠集私注』によれば六〇番と同じ応和元年二月一六日の宴の詩句とされる。宴に集まった文人達は今年は三月に閏のあることを詩に表現しようとした。その時、基にしたのが陸侍御の五九番の詩句と、それを本説とする六〇番の伊勢歌であつたらう。

(三五) 注(二) 拙稿『和漢朗詠集』躑躅部成立の背景——王朝の色彩美——参照。

(三六) この詩句の典故は『白氏文集』「題三元八溪居」(〇九四一)である。「晚藥」とは遅く咲く花の意。「晚藥」は那波本では「晚葉」となっている。白芙蓉は、白蓮の意。白棄天のつつじ詩については平岡武夫氏が詳しい(『白居易の山石榴花(つつじ)の詩』『漢学研究』第二十一・二十三合併号、昭和六〇年三月)。白棄天は、十三編もつつじを詠むがそのほとんどが「山石榴花」表記である。

(三七) 延喜式、本草和名、和名類聚抄等ではつつじは「躑躅」表記となっており、公任の意識にも本草表記があつたかと思

われる。

(三八) 「寒食」とは、中国の行事の一つで冬至から百五日目に火断ちをして食事をする日。

(三九) ほととぎすの漢名の杜鵑は、血を吐いて鳴く故事を名の由来とする。その血の色が唐紅なのである。「ときは山」「ほととぎす(杜鵑)」「唐紅」という連想は、「ときは山」と「杜鵑花(つつじ)」「紅」を結び付ける。又、赤羽氏は「思ひいづる」の「ひ」に、炎の「火」が込めであると指摘されている。赤羽学氏『古今集』一四八「唐紅のふりいでてぞ鳴く」の解釈私見(『文学・語学』第一〇七号、昭和六〇年一〇月)・三木雅博氏『漢詩の自然把握と和歌の自然把握』(片桐洋一氏編『王朝和歌の世界——自然感情と美意識——』世界思想社、昭和五九年六月)。

(四〇) 中国では、郭公は蜀王の杜宇(望帝)が臣の妻と通じたことを恥じ帝位を去り、死後その魂が化して郭公になったという伝説(『蜀王本紀』『華陽国志』)や郭公の初鳴きするものは血を吐いて死ぬといひ、郭公の鳴き声を真似ると血を吐いて死ぬ等の伝説(『異苑』)がある。

また、『和漢朗詠集』の「郭公」項目の「一声山鳥曙雲外、万点水蛭秋草中」(一八二)の詩句を採った問題については、奥村郁子氏の御論考がある。(『和漢朗詠集』——「郭公」をめぐって——川口久雄編『古典の変容と新生』所収。明治書院、昭和五十九年十一月)。

又、「款冬」頭詩句一四〇番は、和漢朗詠集の部立構成からは、異例の日本人詩句である。これは「款冬」が中国では「ふきのとう」「つわぶき」を指し、詩材としてほとんど詠まれないため用例が少ないことによる。これらの問題につ

いては蔵中さやか氏の御論考がある。（『和漢朗詠集』「款冬」部の意義）『神戸女学院大学論集』第四十七卷第一号（通巻一三七号）平成十二年七月）。